

瀉 血

大友一夫

◆おおとも・かずお、医師、大友内科医院院長、埼玉県秩父市。

この度の日本東洋医学会総会のテーマを「創造と発展」とし、和田東郭をキーワードとして取り上げたことは意義あることであった。

東郭の時代は日本でも世界でも、復古調の爛熟期である。すなわち18世紀末は、アメリカ独立、フランス革命などの激動期にありながら、文化的には、classicに根差して創意工夫した天才を輩出した時代であった。カント（独）、アダムスミス（英）、モーツァルト（奥）、ベートーベン（独）、ゲーテ（独）などが活躍している。日本では国学の本居宣長が代表的人物であろう。

医学の分野では、1796年、ジェンナー（英）が初めて種痘を実施した。昔から言い伝えられた「二度無し現象」を証明したのである。翌年には、ハーネマン（独）がホメオパシーを提唱したが、これも太古からの伝承である「似たものは、似たもので癒し得る」を、体系化したものである。これらの業績はいまだに継承されており、反古されるものではない。classicは、ラテン語で、市民の六つの階級の最上級を意味する classicus に由来し、最も価値の高いもの、模範的なもの、永続的なものを意味している。

若いころ、東郭の理念や、篤実な人となりに感銘したものであるが、自分が実際に行って来た治療法は、中神琴溪に近いことを感じていた。すなわち、水治療法や、瀉血を重要な治療法として組み入れていたからである。

琴溪と東郭は同い年である。著書はともに、門人の手による。寛政七年（1795年）、琴溪の口述を門人が著した『生生堂医譚』には、吐方法、鉞

鍼（瀉血）、灌法（水治療法）などの治療法が記載され、それらの治験例が活写されている。

鉞鍼について琴溪は言う。

「予ハ曾テ恒ノ師ト云モノナク皆古人ヲ師トシテ学ブナレバ鉞鍼トテモ古人ノ跡ヲ見テ行フ也。又鉞鍼ノ用ハ毒血ヲ去ルニ止マレドモ其奏スル所ノ功ハ預メ期スベカラズ。種々無量ノ症ニ施シテ誠ニ奇功アルモノナリ。内経ニモ鉞鍼ヲ以テ毒血ヲ取ル事数多見ヘタリ。」

これといった師匠につかなかった琴溪は、古人を師と仰いでいる。瀉血も黄帝内経から学び取っているのである。その治験例は、瘀血に伴う痼疾や脳卒中のような救急疾患に至るまで、一々納得が行く。

内経では、気を補瀉するのとはほぼ同頻度で血を補瀉している。例えば、「血有余、則寫其盛経、出血」（素問・調経論篇）とある。勿論実体としての血を出していることは、「刺手太陰陽明、出血如大豆、立已」（素問刺熱篇）の一文を見れば明らかである。しかも孫絡だけでなく、堂々と経脈からも瀉血しているのである。これも当然なことで、「血和則孫脈先満、溢乃注於絡脈、皆盈乃注於経脈」（靈枢・癰疽篇）とあるように、ちょうど毛細血管と動静脈が連なるのと全く同じで、孫脈絡脈経脈は繋がっているからである。

古代中国では、瀉血は日常茶飯事であった。ただ、「刺臂太陰脈、出血多、立死」（素問・刺禁篇）と注意書きがあるように、肘の動脈などを刺して、大量出血を来し、死を招くことも多かったであろう。やがて瀉血は疎んじられ衰退の一途を辿った。

古代ギリシャでも、ヒポクラテスは盛んに瀉血を行っている。いや近代に至るまで、西欧では重要な治療法であった。16世紀に来日したルイスフロイスは「我々は瀉血療法を行う。日本では草による火の塊を用いる」と自慢げに語っている。アメリカ大統領ワシントンも瀉血のし過ぎで死んだとも言われている。

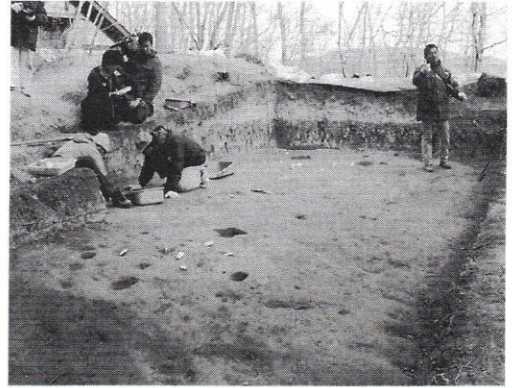
このように瀉血は、世界各地で、最も原初的な治療法として存在していた。恐らく、怪我などで出血したら、痼疾が治ったなどの、経験則に基づくものであろう。近世の琴溪らは、それを見事に蘇らせたのである。

素問・異法方宜論篇に、「砭石者亦從東方來」とある。砭石（へんせき）は皮膚にメスを入れて、

膿や悪血を取り除く堅い石である。東方とは、中国の東海岸でなく、日本であろうと推論する識者もいる。

先に、秩父の小鹿坂遺跡から、50万年前の生活遺構が発見された。そこから当時の石器も発掘されている。今わたしはその光り輝く石器の中に、砭石を思い描いている所である。

小鹿坂に 光り顕わる いにしへの
石もていやす 人もありしか



小鹿坂遺跡発掘現場